

階級

階級

井上光晴

講談社

階級

昭和四十三年一月二十日 第一刷発行

著 者 井上光晴

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二―二一

電話東京（九四二）一一一一（大代表）／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定 価 五六〇円

装 幀 稲垣行一郎 写 真 武田幸子

落丁本、乱丁本は、おとりかえいたしません。

階

級

ああ、狂い咲きするまんじゅしやげ

十円銅貨が音たてて

くるくるまわって川床に

い、い、い、い、突込んだ

（閉山節）

1

どうしてそいつがそんなにたくさんの鼠を飼うとるのかわからん、と行商人はいった。

それも白鼠とかほかの変った種類の鼠とかいうのならとにかく、ただのどぶ鼠だからね。人に売るためでもないし、食用にしてくうわけでもない。漢方薬売りは薄茶の半袖シャツを着ており、鬘でもかぶったように、生え際の目立つ、妙に黒っぽい頭をしていた。三百匹ばかりもおったろうか。トタン板と寄せ集めの金網で作った小屋の中にかたまつて、じゅうつというような焼き鳥みたいな声を上げとる。それに生きたままの犬を放り込むんだからね。どうなると思う。鼠は逃げ惑うと思うか。それどころか、四方八方から襲いかかるんだ。あつという間もない。何というとったかな、アフリカかどこかの川で、水牛なんかに襲いかかる魚がおつたろう。ちょうどあれ。ああいうふうに襲いかかつて、投げ込まれた

犬はぎゃあぎゃあ啼きながら暴れ廻つとるうち、内臓を食い破られてぐたつと動かなくなる。そうするともうお終いだ。忽ち白骨になるまでしゃぶりつくされてしまふんだから。

一九六六年の夏、佐世保から平戸口に向う急行バスの車中で、後方の席に坐つた行商人がその話をはじめた時、まばらな乗客はにやにや笑いながら耳を傾けていた。退屈しのぎにちやうどよかつたし、冗談と思えないほど漢方薬売りのまじめくさった口調が、やがてどんでん返しされるであろう話のおちに、充分の期待を抱かせたからである。有家直道は男より二列前の席できいていた。昨日の午後、東京を發つて佐世保駅に着くまで、二十時間余りの間、彼は殆ど眠っていなかったが、どんよりとして熱っぽい頭の裡に、妙に粘っこい行商人の声は、おしつけるように入ってきた。

「まあ、自分の眼で確かめんことには本当にできんだろうが、何かこう煮え立った油の中に放り込んだ肉片みたいに、じゅつという音を立てたと思うたら、あつという間に生きとる赤犬が白骨になつてしまふたとだからねえ。それも小犬というわけじゃない。ちゃんと犬殺しの捕って行くような野良犬。わたしが見たのは犬だったが、猫でも変らんとその家の者はいうとつた。ぎゃつという悲鳴が二、三度きこえたと思うたら、眼玉まで食われてしまふとる。……」行商人は言葉を重ねた。

「鼠が猫を食うんか。できたね、こりゃ」

風呂敷包みを膝においている男がいうと、皆が笑った。

「まあ、わたしの話を信じられんというのなら仕方ないがね」行商人はなおもいった。「世の中には信じられんことが起りよる。今度、北松の一带を廻ってみて、つくづくそう思うたよ。あれだけ栄えた炭鉱がみんな全滅してしもうたとだから、そりゃひとつやふたつ奇天烈なことも起るだろうが、生きた犬を餌にしとる鼠なんて、これまできいたこともないからねえ」

「ほんとに話の上手な人ね」有家直道の前席に坐っている女が呟くようにいい、横の男が半ばからかう表情をみせて振り向いた。

「そりゃ何処ね、一体。あんたが見た、そのたくさん鼠を飼うとる場所というのは」

「慈眼炭鉱」行商人は即座に答えた。「つぶれとるから炭鉱とはいえんかもしれんけどね」
「慈眼炭鉱の何処。おれはあの辺のことよう知つとるが」

「三股寄りの方。炭鉱のあつた時分は小張というところかな。少し行った所に何とかという精神病院ができとるよ」

「小張ね」男はいったが次の言葉につまった。

「慈眼か何か知らんが、鼠が猫を食うようになったちゃおしまいだな」できたね、こりゃと
いった男が、どういうわけか不機嫌な声をだした。

「猫じゃない。犬だよ」

「しかし、さっきあんたは猫でも変らんと、そういうたろう」

「猫でも変らんとはその家の者がいったんだ。わたしじゃない。わたしが見たのは犬だからね。それでもあんなふうにいっぺんにやられる犬を見ると、猫でも変らんといわれ
たら、そうかねと思うようになるよ」

「冗談もほどほどにしとかんと、元に戻せんようになる」バスの中央に坐っているワイ
シャツにネクタイをした男が中腰になって、裁決をつけるような口調でいった。「猫とか
犬とか、話としちゃおもしろいが、そんなふうにはいい張られると、きいとする方も人間だか
ら、いわずにいいことまでいってしまう。話にはやっぱり引上げ時がかんじんだからね」
「だから現場を見なければわからんと、わたしはいうとるんだ」

「現場。あんたの舌の先の現場かね。何百匹か知らんが、わけもないのにどぶ鼠を飼うと
るという話が土台眉唾だと思ふとつたら、こともあろうに今度は生きた犬まで食べさせる
とだから。それも大概分のところで止めとけば、まだ笑ってすませるのに、慈眼の小張な

んてはつきりいうもんだから、笑い話ではすまされんことになってしまふ。そうでしょう。みんな」

「わたしは最初からありのまま、見たままの話をしとるだけですよ」漢方薬売りは負けていなかった。「だからこそ、それは何処だときかれれば、慈眼炭鋤の小張区だと、ちゃんと場所まで教えた。それがどうして眉唾だといわれるんですか」

「慈眼炭鋤なんて、今は誰も住んどらんよ。そりゃあんたのいう野良犬位は住んどるかもしれんけどね。あたしあ、二年ばかり前、あそこをトラックで通ったことがあるが、炭住の跡には草ばかり生い茂つとって、人間なんかひとりも会わなかった」

「二年前は知らんが、今は住んどるんだ。嘘だと思ふなら行つてみなさい」行商人はいい返した。「それもひとりや二人じゃない。精神病院のまわりにはちよいとしたマルタン（炭鋤離職者）の部落ができとるよ」

「ああ、ああ、もう」

有家直道の前席に坐っている女はわざとらしく声を上げて背のびをしたが、二人とも止めなかった。

「一体あんたは何用があつて、つぶれた炭鋤なんかに行つた。それとも、慈眼炭鋤にすれば

生き犬を食う鼠の見世物が見られるというポスターでも、何処かに張ってあったのかね」
「わたしは商売しとるんだから、人の住んどるところなら何処にでも入って行きますよ。

……」

行商人と乗客のやりとりをきいているうち、そのままの姿勢でいるのに耐えられぬような気怠さが有家直道を襲った。しかし目を閉じて、瞼の底は覚醒剤入りの絵具でも塗ったように黄色く乾いている。そして黄色い絵具をじいっと見つめていると、次第にひとつの顔に形作られていく。

二ヵ月前、満石常雄と名乗る青年が、東京、荻窪に住む彼の下宿を訪ねてきた時、有家直道は咄嗟に自分と何らかのつながりがあることを感じた。自分より二つか三つ年少だと思われる青年の顔は少し面長ではあったが、彼によく似ていた。満石常雄はまるで挨拶代りのように、先月、母の英子が博多で病死したことを告げ、死ぬ間際まで直道兄さんの名を呼びつづけたので、それを知らせにきたのです、といいながら目を伏せたのだった。

「それで君は……」

「ええ、弟です。兄さんのことはずっと以前から母にきいていましたが、会って迷惑がかってはいけないと思っていました。母もそういていましたし、当時は僕の方の父も

いたものですから……」満石常雄はいった。初めから口にした直道兄さんという言葉の慣しさを延長し定着させるかのように。

「迷惑だなんて……。それで母は何の病気で死んだのですか」

「……心臓です。心臓がわるくて……」やや間をおいて満石常雄はいった。

それから彼を兄さんと呼ぶ青年は、母と自分のこれまでの生活に関するいろんなことをたてつづけに喋った。

「さっき、僕の方の父といいましたが、実をいえば僕にとつても二人目の父になるんです。本当の父は僕が生まれるとすぐ船に乗るといつて出たつきり、行方不明になったそうです。」

かあさんはずっと苦勞のし通しでした。二度目の父はほかに女を作って、金も入れなかったの、かあさんがずっと洋裁などをして働いていました。かあさんはいつも口ぐせのようにいつていたんですよ。こういうくらしをしななければならんのも、みんな直道さんを捨ててきた罰が当たったんだ。それにはいろんな深い事情があったのだけれども、直道さんは何にも知らない赤ん坊だったのだから、どんなにそれが難しいことだったとしても、かあさんはやっぱり直道さんを有家の家に残してきてはいけなかったのだ、ともいつていま

した。

もう大分前のことですが、唐人町のそば屋で働いている若い人にかあさんは名前をきいたことがあるんです。ふっと直道兄さんのような気がしたからだといっていました。直道兄さんとは赤ん坊の時に別れているので顔を見覚えてはいるはずもないが、いつも直道兄さんのことを考えていたので、そんな気持ちになったのでしょうか。そば屋の若い人は唐津からきたと答えたそうです。

そういうかあさんの気持ちを知っていたので、僕はいつも直道兄さんに会いたいと考えていたんです。でもさっきもいったように、かあさんに固く止められていましたから、できなかったんですよ。かあさんが亡くなる時、直道兄さんの名を呼びつづけるので、僕は枕元で約束したんです。どんなことをしても、きっと直道兄さんを探しだしてかあさんの気持ちを伝えるよという、じいっと僕を見ていましたが、目にいっぱい涙をためてうなずいてくれたんですよ。

僕は今、漫画を勉強しています。中学の頃から漫画が好きで、少年雑誌に何度か入選したこともあります。家がそんなふうな事情だったので高校には行けなかったけれども、漫画には絶対自信があるんです。横浜に親切な運送会社の社長さんがいて、僕はその事務

所の二階に寄宿しながら勉強していたんですが、今度会社がよその会社に合併されて、そこにいつまでもおれなくなつたんですよ。……」

前ぶれもなくあらわれた異父弟のべたつくような口調にひきずられて、結局、部屋を移転するのに必要な金（一万円）を貸したのだが、自分に全くよく似た男が去った後、有家直道は母とはついに生きているうちに会えなかったのだという感傷のなかで、いいような嫌悪感にさいなまれていた。

一ヵ月ばかり経った頃、満石常雄はふたたびやってきた。三輪車を運転中軽い事故を起してしまった。弁償金七万円のうち二万円程立替えてくれないかという申し出だったが、有家直道はそんな余分の金を持っていないと断った。すると急に、三千円でもあれば助かるのだと金額を大幅に変更し、彼はむかつくような気持で二万円渡した。そしてさらに二週間程後、品川運送店を経営しているという男の来訪を受けたのである。運送店主の言葉によると、住込んだばかりの満石常雄が引越料を着服して逃げたというのだ。大した金額ではないが、保証人もおかず、布団まで算段して住込ませた人の親切を足蹴にした性根を許し難いので、兄であるあなたに承知しておいてもらいたいといういい分であった。

「あの人と僕は何も関係ないのでしょ」

「しかし、あんた方は兄弟でしょう。そうじゃないんですか」運送店主は部屋の中をじろじろと見廻しながらいった。

「それは、兄弟といえはそうかもしれませんが。母親が一緒ですからね。でも僕は生まれるとすぐ、その母親と別れているんです。会ったこともありません。あの人が訪ねてくるまで、ああいう兄弟がいたことさえ知らなかったんですから」

「むこうじゃはつきり、あんたを兄だといってましたよ。こっちだって、いくら手不足だからといって、ただの風来坊を住込ませたりはしませんよ。大した金額じゃないといつて、引越に行けば、直接現金を扱う商売だからね。大学に通っている実の兄がいるというから、その言葉を保証人代りにして信用したんだからね。そうでなければ、こうやってあんたを訪ねてきたりはしませんよ」

「どうしろというんですか。それで……」

「どうしろとはいいませんよ。正式の保証人ならともかく、兄弟だというだけだからね。ただ、こっちも大きい商売をやってるわけじゃないから、引越料位といって、みすみす泣き寝入りするわけにもいかないんだよ。……」

「警察にでも何処にでも訴えて下さい。関係のないことにタッチするのは嫌なんですよ、

僕は……」

有家直道は瞼を開いた。目を閉じると眠れないのに、光線が瞳孔に入ると、頭がくらくらしてとても辛抱できない気分だった。犬を食う鼠の話はどのようにケリがついたのか、或はつかなかったのか。車内には白々しい空気が流れ、誰もが気まずい顔をしていた。

「どこか加減でもわるいのかね」

「あ、いいえ」彼は隣席の男に答えた。「昨日の晩、汽車であまり眠れなかったもんですから」

「休暇か何かで帰ってこられたのかね」

「そうです。夏休みです。学生ですから」

「ああ学生」

男がそれっきりものをいわなくなったので、彼は首をまげて走って行く窓の外を見た。テレビのアンテナがあるので、人間が住んでいるのだと思える細長い家が道下の川岸にへばりつくような恰好で建っている。何に使用するのか、空地の溝には古ぼけたコンクリート枠が幾段かに積上げられており、それを過ぎると、つぶれたデパートの広告板を壁に貼りつけた農家が四軒ほど点在する。虎屋という名前をつけたそのデパートは、朝鮮戦争時

の景氣をあて込んで佐世保の目抜通りに開業されたのだが、二年も経たぬうちに、以前の玉屋デパートに打ち負かされたのだった。

「鼠がまだ野良犬でも食つとる間はいいが、金網でも破つてでてきてみる。眉唾だとか馬鹿話とか、笑うとってはすまさんごととなるからね。……」

声は行商人のものだった。有家直道は黒い川床に遊ぶ裸の子供たちを見ていたが、「まだあんなことをいいよる」という反撥は、漢方薬売りがまだいい終らぬうちにきこえた。

「鼠が金網を破つたらどうなる。犬や猫じゃ飽き足らずに、人間にでも襲いかかるというのかね」

風呂敷包みを膝においた男が合槌を打つように笑ったが、その声はかすれた。

「そういうことになろうね」行商人はいった。「あんた達がわたしの話を信用せんからいうが、慈眼炭鋤にはちゃんと鼠を飼うとる者がおるんだ。あの辺の部落を全部廻ったわけじゃないから、もしかすると、鼠を飼うとる者はほかにもおるかもしれん。眉唾だと思ふ者はそう思うとればいい。今に事件が起きてから、ああやっぱりあの人のいうたことは本当だったと思うても遅かろうと、そういうとるんだ。……こりゃ、今そういわれてみて考えたんだが、生きた野良犬を白骨にする位だから、人間の赤子ぐらいひとたまりもなかる